2022 年 4 月 18 日
子どもの日本語教育研究会　研究企画委員会　Project-B

活動報告　読書会(1)　2022 年 3 月 13 日実施
『思考と言語　新訳版』第 1 章　研究問題と方法

ヴィゴツキー,レフ.セミョノヴィッチ.著、柴田義松訳(2001)『思考と言語　新訳版』新読書社

子どもの日本語研究会研究企画委員会 Project-B では、「参加とことば」をテーマに、子どもたちが学習や社会活動に参加することとことばを発達させていくこととの関わりについて検討を重ねています。現在は、第 8 回大会(2023 年 3 月開催予定)に向けて、足腰を鍛えようと、テーマに関連する図書を選定し、輪読による読書会を開いています。これから、読書会の様子を少しずつみなさんと共有していきます。なお、お伝えするのは図書・文献の解説や分析ではなく、あくまでもその図書によって「インスパイア」された「個人の感想」です。

2022 年 3 月 13 日からは、ヴィゴツキーの『思考と言語　新訳版』を輪読しています。
第1章「研究問題と方法」ではヴィゴツキーの問題意識と分析方法について述べられています。抽象的な内容が多く、折れそうになる心を必死で支えて本に向かっています。
第 1 章の読書回を通じて、いちばん印象に残ったところは次の箇所です。

> 私が、だれかに私が寒いということを伝えたいと思うとする。…本当の理解と伝達は、私が私の体験していることを一般化し、名づけることができるとき、すなわち私の体験している寒いという感情を、私の相手も知っている一定の種類の状態に関係づけることができるときにのみ、行われるであろう。それだから、まだ一定の一般化というものをなし得ない子どもには、すべてのものが伝達不能なのである。このばあい問題は、適当な単語や音の不足にあるのではない。適当な概念や一般化が不足しているのであり、これらなしには理解は不可能なのだ。(p.23)

この例から私は多言語環境で育ち、自分の気持ちをうまく表現できなくて、友達の輪に「参加」しにくい子どものことを思い出しました。そんな子どもを見るとついつい「語彙を増やさなければ」「語彙カードをやってもらおうか」となってしまいます。でも、子どもに不足しているのは、自分の気持ちを「一般化」するということだとするとやっぱり一般化の経験をたくさんしてもらうということが大事なんだろうなあとあらためて思いました。

(浜田)